

シンポジウム事例紹介①

様々な学校連携活動 —横浜市歴史博物館を事例に—

横浜市歴史博物館 刈田 均

はじめに

横浜市歴史博物館は「横浜に生きた人々の生活の歴史」をテーマとし、平成7年（1995）1月31日に開館した。

昭和63年（1988）に策定された『横浜歴史博物館（仮称）建設基本計画』には、「学校教育とのタイアップ活動」を重視し、「随時の見学にとどまらず、学校教育活動の一環として、繰り返し活用されるよう、学校との密接な連携による活動を展開することが望まれる」と記されている。学校連携活動は館の計画段階から求められていた。

本稿では、開館から30周年を迎えた当館が、これまで行ってきた学校連携活動を紹介したい。

1 博物館内での学校連携活動

(1) 小学校

小学校では主として小学6年生、4年生、3年生に向けた団体見学のプログラムを提供している。

6年生は初めて通史を学ぶ学年である。当館の常設展示は、小学校6年生をターゲットに、解説の文字数を少なくし、実物・模型・複製資料とビジュアルでわかりやすいグラフィックパネルを組み合わせ構成している。また隣地には弥生時代の環濠集落とその墓地である方形周溝墓を復元した「大塚・歳勝土遺跡公園」がある。通史の最初の単位となる原始時代を常設展示室で学ぶことができ、また遺跡公園では竪穴住居に入ったり高床倉庫や墓地を見たりすることができる。遺跡公園と常設展示室の見学には2～3時間ほど要することから、遺跡公園内にある工房で昼食をとる学校も多い。市内外から多くの小学校が校外学習の一環で団体見学に訪れている（図1）。

横浜市内の小学4年生が秋季に学習する単位として、横浜市中区で江戸時代に開発された吉田新田がある。近世ブースにはこの学習単元を踏まえた吉田新田開発の展示を設けており、展示の解説とミニ授業、また希望する学校には当時の土木作業を体験する「もっこ体験」を組み合わせた見学



図1 大塚・歳勝土遺跡公園内の高床倉庫を見学する小学6年生。

プログラムとしている。主に近隣の小学校が訪れている。

3年生は「昔の暮らし」の単元を冬季に学ぶ。大塚・歳勝土遺跡公園内には、港北ニュータウンの名主の家「旧長沢家住宅」を移築復元した都筑民家園があり、茅葺き屋根の古民家で、板の間と囲炉裏、畳や障子などを見学できる。それに、工房でのミニ授業と博物館での昔の暮らしのミニ展示を組み合わせた見学プログラムを設け、主に近隣の小学校が訪れている。

(2) 中学校

中学校では主としてキャリア教育の職場体験を受け入れている。1校あたり生徒2～4人程度とし、博物館の受付や監視、また図書閲覧室関連の業務を中心に体験する。

また横浜市立中学校社会科研究会と連携して、当館で中学校社会科作品展を開催し、期間中には研究発表会を行っている。

(3) 高等学校

中学校と同様にキャリア教育に協力し、神奈川県立高校や博物館近隣の私立高校からインターシップを受け入れている。県立高校からは夏季休



図2 インターンシップで図書整理を行う高校生。

休暇中に4名程度を受け入れ、資料整理や司書の業務を中心とするプログラムを組んでいる(図2)。また神奈川県高等学校総合文化祭に協力し、社会科学研究発表大会の開催や審査員の派遣なども行っている。

(4) 大学

館務実習を毎年10名程度受け入れている。このほか学芸員課程や社会教育課程、教職課程、歴史・民俗・考古・美術等を専攻する課程での施設見学を受け入れている。また市内の大学と協定を結び、インターンシップを受け入れている。

(5) 個別事例

支援学校やインターナショナルスクールの見学では、それぞれの事情に応じて、兜の複製をかぶったり駕籠に乗ったりする体験、土器や石器などに触る体験、まが玉づくりなどのワークショップなどを提供している。

(6) 教員に向けて

横浜市教育委員会では、毎年夏に市立学校(小学校・中学校・高等学校)の教員を対象に、「博物館利用研修会」を実施している。当館を会場に、



図3 博物館活用研修で土器を観察する教員。

バックヤードツアーによる博物館業務の紹介、常設展示の意図や構成の解説、収蔵している博物館資料を前にした解説やワークショップを行っている。博物館業務を知り、実際に考古資料や民俗資料に触れたり、古文書や美術作品を実見したりしながら資料を見る視点を学ぶワークショップが好評で、教員対象の研修のなかでも希望者が多いという(図3)。

このほか、県立高校教員が新任から5年次に行う教員研修にも対応している。

2 博物館外での学校連携活動

(1) 小学校

小学校6年生を対象に、縄文土器づくりの訪問授業を行っている。テラコッタとシャモットを混ぜて水を加えながら練る「土練り」、出来上がった粘土を輪積みという当時の方法で積み上げて土器の形を作り、その後縄文原体を使って文様を施す「成形」、成形を終えた土器を乾燥させた後、校庭で薪を使って焼成する「野焼き」という工程を、3日かけて行っている。できるかぎり当時の方法を用いる本格的なものである。学校側には野焼きの許可であったり薪の確保であったりと、事前の調整や準備等を求めている。博物館側も学校も負担は相応だが、出来上がった土器を手にした子どもたちの満足度や達成感には目を見張るものがある(図4)。

また博物館に見学に来る6年生の学習効果を高めるための事前訪問授業や、4年生の吉田新田と3年生の昔の暮らしについての訪問授業を行っている。昔の暮らしについては、小学校の学校資料室



図4 縄文土器づくり訪問授業での野焼き。

に近隣他校の3年生が見学に来た際に解説する訪問授業も行っている。

(2) 中学校・高等学校

中学校へは、キャリア教育の職業講話で学芸員が訪問授業を行っている。

高等学校への訪問では、歴史クラブの活動で学校所蔵の考古資料整理のために学芸員が指導にあたった事例がある。

3 オンラインによる連携

(1) ホームページ

ホームページのコンテンツとして、「子どもと先生のページ」を設けている。

子どものコーナーでは、横浜の歴史を調べる「歴史クイズに挑戦」と、昔探しや吉田新田の開発を調べる「昔探しクイズに挑戦」があり、前者は常設展示室の展示資料を利用した学習クイズを、後者は3・4年生の単元の内容の学習クイズを提供している。

先生のコーナーでは、学校見学での博物館の見学マナーを紹介したマナーブックのダウンロードや、博物館で制作した3年生の昔の暮らし、4年生の吉田新田の学習に有効な副読本の紹介を行っている。

このほか当館や横浜開港資料館、横浜都市発展記念館を活用した授業例として小学校の教員向けに「社会科学習指導案」事例集、中学校教員向けに「社会科学習指導案」事例集（歴史的分野）を公開している。いずれも市立学校の先生方に協力を得て小学校向けは「学校の博物館利用研究会」、中学校向けは「教材開発委員会」を組織して検討



図5 小学3年生向けに配信している動画。

を重ね、執筆いただいたもので、前者は8例、後者は17例である。

(2) 動画配信

小学校3年生の「昔の暮らし」単元に合わせて制作した、昔の暮らしと道具の動画を35本、小学校6年生の見学に際して有効な大塚遺跡の見どころを解説した動画2本を博物館の公式youtubeチャンネルから配信している(図5)。小学校3年生向けの動画は、市立小学校に配布している学習用リーフレットと連携した特設ページからも視聴できるようにしている。

4 教員に向けた活動

平成18年(2006)に、小学校や中学校での授業に使える指導案を掲載した『見学と授業に役立つ博物館利用の手引き』を、博物館利用促進のために刊行した。

現在ホームページで公開している小学校の教員向けの「社会科学習指導案」事例集、中学校教員向けの「社会科学習指導案」事例集は、本書に掲載された指導案をベースとし、指導要領の改訂に対応してその後執筆された指導案を追加している。

5 学校連携事業の担い手

(1) 事務職員

学校団体見学は、学校受付担当の事務職を中心に事務職全員で対応している。学校予約は、インターネットによる汎用予約システムをカスタマイズして利用し、上半期と下半期に分けて申し込みを受け付けている。6年生は遺跡公園ガイド、4年生は常設展でのミニ授業と吉田新田展示の解説、3年生は都筑民家園の解説とミニ授業並びに博物

館内のミニ展示見学、そして全学年共通で昼食場所の利用の有無、大型バス駐車場の利用の有無等の申し込みを受け付けている。申し込みはオンラインで行えるが、遺跡ガイドや利用施設等の時間の振り分け、また複数校来校時の時間枠などは学校受付担当の事務職員が手作業で調整して返信する。小学校以外の予約については、電話で受け付けている。学校団体見学数は令和6年度で年間171校あり、相応な事務量となっている。

また、学校団体見学時の子どもたちへのガイドや解説を担う展示解説ボランティアのとりまとめは専門職とともに事務職も担当している。令和7年度は82名が登録しているが、学校団体見学日時の連絡や調整、また研修やボランティア総会の実施等、さまざまな対応を行っている。

(2) 専門職員

博物館内で行われるキャリア教育にかかわる学校連携活動は学芸員や司書がプログラムを組んでいる。中学校の職場体験では、受付業務の受託者や当館の臨時職員の協力を得て、受付や図書閲覧室の業務を体験させている。また高等学校のインターンシップでは、上記業務に加えて考古資料や民俗資料の整理なども行う。大学のインターンシップでは2週間ないし4週間という長期にわたることから、専門・事務を問わずその時期に行う催事も含めたさまざまな業務プログラムを設定している。また教員向けの研修では学芸員が講師を務めている。

このほか、個別事例となるワークショップや体験などは、学芸員と活動支援ボランティアとで行っている。なお館務実習については本稿では割愛する。

博物館外での学校連携活動では、前述した縄文土器づくりと職業講話、また吉田新田や昔のくらし等、一部の訪問授業、クラブ活動の支援を、またオンラインコンテンツのうち大塚遺跡の見どころ解説動画や博物館利用研修会での講師を専門職が担っている。

(3) エducator

当館の指定管理者である（公財）横浜市ふるさと歴史財団では、総務課に元横浜市立学校の学校長で、博物館と学校とをつなぐ役割を担う3名のエドゥケーターが配置され、訪問授業やオンライン



図6 エドゥケーターによる吉田新田のミニ授業。

コンテンツの制作、教員向けの活動を行っている。博物館内では、4年生と3年生の見学時に行うミニ授業を担うほか、6年生の学校見学時には常設展示室に常駐し、児童からの質問に答えたり、解説したりしている（図6）。館外の活動として行っている小学校への訪問授業は令和6年度で延べ189校に及び、児童数は1万5000人余りである。オンラインコンテンツである小学3年生向けの昔のくらし動画制作もエドゥケーターが担当している。授業のニーズを反映した内容の動画は好評で、令和6年度の視聴回数は13万回を超えている。『見学と授業に役立つ博物館利用の手引き』に掲載し、ホームページで公開している小中学校の教員に向けたモデル指導案は、エドゥケーターならではの成果である。このほか、子どもたちに接するボランティアに向けて、現在では看過できない言葉やしぐさなどについて注意喚起することを目的とした研修も担当している。学芸員では対応できない分野であり、当館における学校連携活動においては、エドゥケーターが果たしている役割とその成果は大きい。

(4) ボランティア

当館では、展示解説ボランティアと活動支援ボランティアという2つのボランティアを組織して活動を行っているが、学校連携活動でも欠かせない役割を担う。

展示解説ボランティアは、学校団体見学で訪れた子どもたちに最前線で接している。前述のとおり、6年生には大塚遺跡や歳勝土遺跡の遺跡ガイドを、4年生には吉田新田の常設展示解説を、3年



図7 展示解説ボランティアによる旧長沢家住宅での解説。

生には昔のくらしにかかわる都筑民家園のガイドを行っている(図7)。また常設展示室では、団体見学に来た子どもたちの質問に答えたり、個別の展示を解説したりする対応も行っている。学校見学での解説で求められる内容は一般向けとは異なることから、当館では、学年毎の研修を行うほか、子どもたちに接する際のリテラシーの研修を行っている。

また活動支援ボランティアは、さまざまな博物館活動を支援するボランティアで、主にワークショップの指導支援を行っている。前述した博物館内での学校連携活動でワークショップを行う際は、活動支援ボランティアの協力のもと行っている。

(5) 博物館関連団体

当館には、講座受講生OBが組織した会員相互の生涯学習を中心とした活動を行う団体がある。実験考古学講座「縄文土器づくり」の受講生OBが組織している「横浜縄文土器づくりの会」もそのひとつで、前述した縄文土器づくりの訪問授業を学芸員と一緒にしている。

土練り・成形・野焼きといった工程を子どもたちに指導するには熟練の技術が求められる。また野焼きはやけどなどの危険も伴う。メンバーは実験考古学的方法で縄文土器を製作する活動を年

間3回ほど行っており、豊富な経験からの確かな指導を行っている。縄文土器づくりの会のおかげで成立している訪問授業である。

(6) 地域団体

当館では、金沢区から委託を受けて区内小学校の希望校に「むかし体験授業」を実施している。この学校連携活動では金沢区の地域団体と連携して訪問授業などを行っている。

金沢区の横浜市立大道小学校にある「大道ふれあいむかし資料館」で所蔵する民具を小学校に運んで行う訪問歴史授業と、大道小と横浜市立富岡小学校にある資料館に訪れてそこで授業を行う資料館歴史授業の二つのパターンがある。訪問授業と富岡小の資料館で行う資料館歴史授業は「NPO法人横濱金沢シティガイド協会」のスタッフが、大道小の資料館歴史授業では「大道ふれあいむかし資料館」を運営している地域有志で組織された「ふるさと大道村」のスタッフが講師となり、財団から派遣されたエデュケーターとともに授業を行っている。令和6年度は訪問歴史授業を7校、資料館歴史授業を6校、計13校で実施した。

終わりに

横浜市は市立小学校が本校・分校併せて336校(令和6年)あり、全国で最も小学校数が多い自治体である。これまで記してきた学校連携活動は、当館が各学校に向けて公平に対応できる活動を模索してきた結果とも言える。

当館の小学校団体見学数は、校外学習の多様化、指導要領改訂による6年生の公民単元の追加(4・5月)、またコロナ禍を経て、減少してはいるものの令和6年度で延べ141校を数える。一方、博物館外で行う訪問授業等の実施小学校数は延べ189校である。合計330校で、横浜市の市立小学校数とほぼ同数となる。

当館の学校連携活動は、職員はもちろん、博物館にかかわる市民や地域の団体など、多様な主体と連携し、協力をいただいているからこそ、行えてきたことを最後に記しておきたい。